

授業改善に向けた校内研修の構築 ～2つのマネジメントサイクルを取り入れて～

教職実践応用領域 学校づくり履修モデル

八飼 明美

I 今日の社会的背景

21世紀は、「知識基盤社会」の時代であると言われる。そして、「知識基盤社会」の構築を目指し、「人材こそが国の宝」という立場から、21世紀を生き抜いていける資質や能力を備えた人材の育成に対応した教育が求められている。

平成17年中教審答申「新しい時代の義務教育を創造する」、平成18年中教審答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」、平成23年中教審審議経過報告「教職生活の全体を通じた教師の資質能力の総合的な向上方策について」においては、現職研修の一層の必要性が示された。未来をになう子ども達を育成するという立場から、教師一人一人が資質を保持したり、向上させたりしていくために、これまで以上に組織的で計画的な教育活動を実践したり、新たな状況に対応した研修の仕組みを構築したりしていくことが必要となろう。

しかし、実際の学校現場は多忙化を極め、自分から進んで研修に参加したり、校内で学び合ったりすることが難しくなっている。それは、本校においても例外ではない。教師集団が学びの共同体としての機能を形成し、子ども達の育成のため、学校生活の大半を占める授業と向き合い、資質の向上に努めることは、喫緊の課題と言える。

II 本校の実態と課題

本校の実態を教師、児童、校内研修に分けて示すとともに、それらから見出される課題について記す。

教師の実態	教師の課題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師の教職経験年数に偏りがある ○ 新しい教育を取り入れにくい体質がある ○ 考え合ったり、伝え合ったりさせる授業に慣れていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 若手が先輩から学んだり、先輩が若手を育てたりする体制の形成 ○ 今日の教育の知見獲得 ○ 「教える授業」から「考えさせる授業」への授業改善
児童の実態	児童の実態から見出される教師の課題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 学力が高いが思考・判断・表現をすることが苦手である ○ 聴くことやコミュニケーションが苦手である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童の思考・判断・表現する力の育成 ○ 児童の傾聴する態度やコミュニケーション能力の育成
校内研修の実態	校内研修の課題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもの実態分析により研究の必要性をとらえていなかった ○ 組織内の役割や連携が明確でなかった ○ 教師同士で授業を見合ったり磨き合ったりする場がなかった ○ 研究の目標や手段を共有することができなかった ○ 研究を振り返り改善する場がなかった 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新しい研究テーマの設定 ○ 年間計画の作成 ○ 組織の見直し ○ 研究授業の体制づくり ○ 研修会の設定 ○ 評価と改善の工夫

III 課題実践研究のテーマの設定

教師、児童の実態より見出された本校教師の課題から、児童の思考・判断・表現する能力を育成するために教師が今日の教育の課題を取り入れながら、「教える授業」から「考えさせる授業」へと授業を改善することが必要と考えた。そして、それとともに校内研修の課題と考える「新しい校内研修テーマの設定」「組織の見直し」「研究授業の体制づくり」「研修会の設定」「評価と改善の工夫」そして、「年間計画の作成」を通して、教師の達成感や成果につながる校内研修を構築することが必要と考えた。

そこで、課題実践研究テーマを下記のように定め、研究に取り組むことにした。

授業改善に向けた校内研修の構築 ～2つのマネジメントサイクルを取り入れて～

なお、本実践における「校内研修の構築」とは、授業改善に向けた「研修内容（＝教員一人一人の力量を高めるための学び）の形成」と「研修体制（＝研修内容を支えるための全校的な組織や仕組み）の整備」という2つの要素から成るものとし、それぞれにマネジメントサイクルを取り入れて運用することにした。そうすることで、教師が校内研修に見通しをもち、達成感や成果を実感しやすくなると考えたからである。

IV 先行研究

研究を進めるに当たり、多くの資料を参照した結果、以下に示す2つの先行研究が参考になった。

- 田村知子氏（中村学園大学専任講師）の「カリキュラムマネジメントの手法」
- 広島県教育員会の「授業改善のための校内ハンドブック～マネジメントサイクルを取り入れた校内研修の在り方を求めて～」

前者は、主として「研修内容の形成」に関わるマネジメントサイクルを取り上げているのに対し、後者は、主として「研修体制の整備」に関わるマネジメントサイクルを取り上げている。

両者を組み合わせることで、個人の研修内容レベル及び学校組織における研修体制レベルの知見を得ることができ、校内研修を構築するに当たり、その成果を見込めるものと考えた。

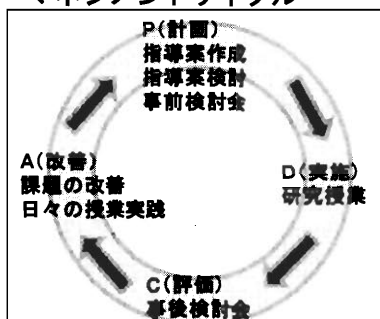
V 研究の構想

1 研究授業を核とした研修内容のマネジメントサイクル

研修内容を形成するために、「研究授業を核とした研修内容のマネジメントサイクル」を立案した。

P（計画）の段階は、教材研究を含めた指導案作成、指導案検討、事前検討 研究授業を核とした研修内容のマネジメントサイクル

会となり、D（実施）の段階は、研究授業の実施や参加となる。C（評価）の段階は、事後検討会に当たる。A（改善）の段階は、事後検討会で見出された課題の改善や日々の授業実践となる。

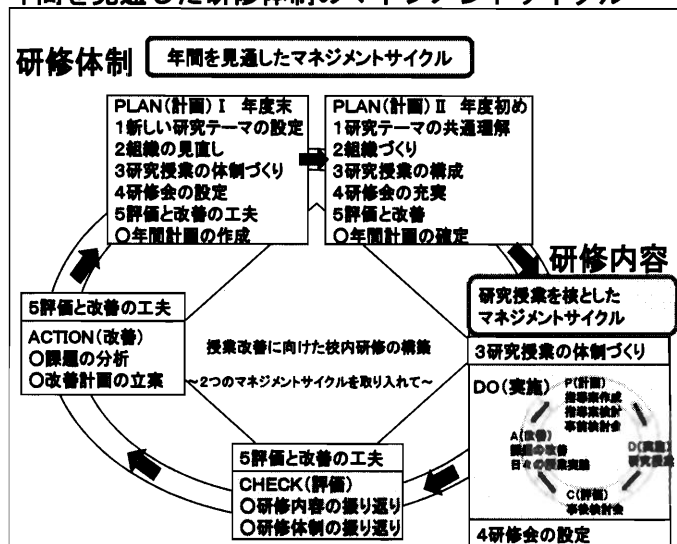


研究授業の実施回数分「研究授業を核としたマネジメントサイクル」を運用することになる。

2 年間を見通した研修体制のマネジメントサイクル

校内研修をより実効性のあるものに高めていくためには、研修内容を支えるための組織体制や仕組みが必要である。そこで、「年間を見通した研修体制のマネジメントサイクル」を立案した。

年間を見通した研修体制のマネジメントサイクル



まず、前年度末のPLAN（計画）の段階では、本校の校内研修の課題である「①新しい研究テーマの設定」「②組織の見直し」「③研究授業の体制づくり」「④研修会の設定」「⑤評価と改善の工夫」「年間計画の作成」についての具体的な計画を立てる。そして、年度初めのPLAN（計画）の段階では、「①新しい研究テーマの共通理解」「②組織づくり」を行い、「③研究授業の構成」「④研修会の充実」「⑤評価と改善」「年間計画の確定」についての計画を確認する。

DO（実施）の段階では、PLAN（計画）の段階で計画した「③研究授業の体制づくり」を「研究授業を核としたマネジメントサイクル」を運用するなかで実施する。また、授業改善に直結した研究授業となるよう「④研修会の設定」で計画したことを実施する。

そして、CHECK（評価）の段階では、「⑤評価と改善の工夫」で計画したことを実施する。ここでは、「研修内容の形成」と「研修体制の整備」に関わる2種類の振り返りを4段階の評定尺度を使って実施するとともに、教師の声を集約する。

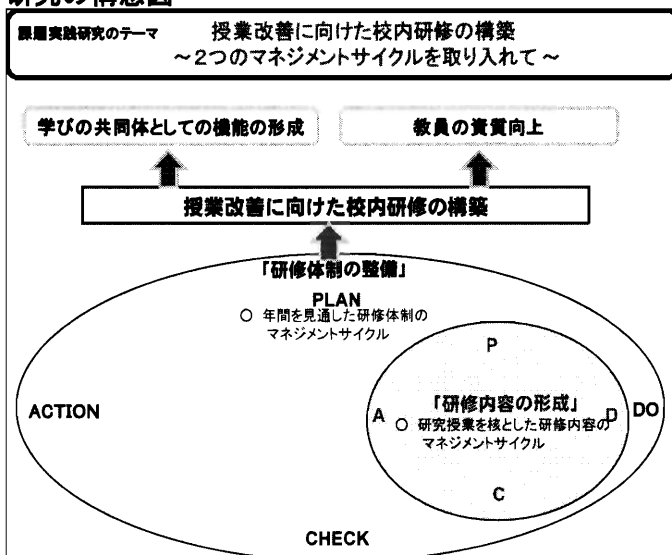
ACTION（改善）の段階では、CHECK（評価）を分析し、次年度の改善のための計画を立てる。

年間を通し、PLAN（計画）、DO（実施）、CHECK（評価）、ACTION（改善）を行う。

3 研究の構想図

「研究授業を核とした研修内容のマネジメントサイクル」と「年間を見通した研修体制のマネジメントサイクル」を組み合わせることで「授業改善に向けた校内研修の構築」を図る。そして、それにより、「学びの共同体としての機能の形成」と「教員の資質向上」を狙う。

研究の構想図



VI 研究の実際

1 年間を見通した研修体制のマネジメントサイクル

PLAN（計画）の段階(平成22年度末の取組)

(1) 新しい研究テーマの設定

新しい研究テーマは、「学校教育目標」及び「目指す児童像」を具現化する過程において設定することはもちろんのこと、新学習指導要領の改訂の柱となる思考力・判断力・表現力の育成を重視しているという「国の動向」や東浦町が個性化・個別化教育を推進しているという「地域の動向」、そして、前年度の現職教育についてのアンケート結果をも加味し、「考えを深め、思いを広める児童の育成～考え合い・伝え合いを核にした個と集団の学びづくり～」とした。教師は、「考えさせる」授業を実施することにより、授業改善を行うこととなる。

(2) 組織の見直し

推進委員会、全体会、専門部会の連携の仕組みを作

り、それぞれの役割を明確に定めた。また、専門部会
は、各教科等部会と総合・生活科部会の2部会にした。

③ 研究授業の体制づくり

① 3種類の研究授業の設定

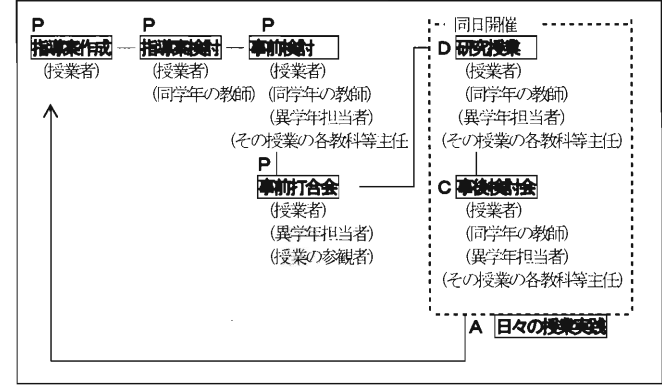
校内研修の目的に合わせて運用できるように、拡大
研究授業（＝研修会や外部講師の指導に関連させた研
究授業）、特別研究授業（＝学校訪問での研究授業）、
研究授業（＝研究目的に合わせ弾力的な運用を図るこ
とができる研究授業）を設定した。

3種類の研究授業をそれぞれ2回ずつ、年間に計6
回実施する。内訳は、総合的な学習2回、生活科1回、
各教科等3回とし、各学年が1回ずつ担当する。

② 共に学び合える研究授業を核とした体制づくり

授業者が1つの研究授業を実践するまでには、指導
案作成から授業実践に至るまで多大な労力を要する。
そこで、授業者はもちろんのこと、参観者の達成感や
成果にもつながるように研究授業の事前段階と事後段
階に計画的な検討の機会を設け、授業者だけでなく参
観者の力量形成にもつながる共同性のある体制を仕組
んだ。

共に学び合える研究授業を核とした体制

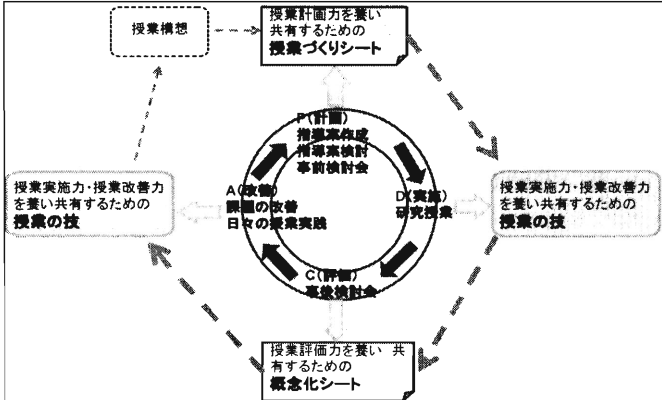


③ 授業改善に向けた手立ての導入

「研究授業を核としたマネジメントサイクル」にお
いては、以下の4つの力を高めることで総合的に授業
改善を図るものとする。

- 授業を計画する力（以下授業計画力とする）
- 授業を実施する力（以下授業実施力とする）
- 授業を評価する力（以下授業評価力とする）
- 授業を改善する力（以下授業改善力とする）

研修内容のマネジメントサイクルと3つの手立て



授業改善の手立てとして、「授業づくりシート」「授
業の技」「概念化シート」を取り入れることにした。

「授業づくりシート」は、「授業計画力」を養い共
有していくためにP（計画）の段階で使用する。新学
習指導要領の理解のうえ、単元の目標を設定し、その
目標に迫るために「この授業でどんな考え合い・伝え
合いをさせるか。」「それを取り入れる理由や留意点」
「期待される子どもの言語活動の姿」を具体的に明記
する。そして、この「授業づくりシート」に記入した
内容は、指導案作成や実際の授業にも生かす。

授業づくりシート

授業づくりシート 名前 ()	
各教科等名	単元名
単元の目標	
* 関心・意欲・態度、思考・判断・表現、技能、知識・理解の目標の中から1つに絞って記入する。	
本時の言語活動の方法	子どもの言語活動
この授業で、どんな考え合い・伝え合いをさせるか	それを取り入れる理由や留意点
例 促 吹き出し、ロールプレイ 中 メモを基に1対1の対話 高 ホスターセッション、ディベート	例 取り入れる時間や場発達段階 取り入れる場所 クラスの様子 集団の形態 集団内の質 準備物品 発問の仕方 教科や単元の特性
期待される子どもの言語活動の姿	期待される子どもの言語活動の姿
期待するA	期待するB
5 備考 (2)指導の力点となる	
4 本時の学習指導 (5)本時の評価規準となる	
上記の考え合い・伝え合いを実施する場を指導案の学習過程の中に設定し、その場面を太線で囲む	

「授業の技」は、子ども達の考えや思いを引き出す
ための手法である。教師の動き、構造的板書、立ち止
まり（＝切り返し）、付け足し発言などがある。「授業
実施力」と「授業改善力」を養い共有していくために、
D（実施）とA（改善）の段階で実践する。

「概念化シート」は、「授業評価力」を養い共有し
ていくために、C（評価）の段階で行うワークショッ
プ型の事後検討会で使用する。参観者は、授業で気付
いたことを書き込んだ付箋をマトリクス状になった
「概念化シート」に貼付しながら討論をする。

④ 研修会の設定

本校が目指す授業改善に向けて、教師全員の共通理
解を図るために、年間3回程度の研修会を設定する。

初年度となる平成23年度は、下記研修会を実施する。

- 研修会①…考え合い・伝え合いを取り入れた授業
のイメージを共有化するための研修会
～授業ビデオの視聴を通して～
- 研修会②…授業のつくり方・見方を共有化するた
めの研修会
～授業づくりシート、概念化シートの活用法～
- 研修会③…日常の授業における子どもの考えや思
いの引き出し方を共有化する研修会
～「授業の技」を知る会～

⑤ 評価と改善の工夫

教師一人一人の授業改善に資する校内研修を構築す
るためには、実際の校内研修について振り返り、課題
を見出し改善していくことが必要となる。そこで、本

校の校内研修の課題をもとに、「研修内容の形成」についての振り返りを10項目、「研修体制の整備」についての振り返りを6項目作成した。実施の時期は、原則ステージ（後述）ごととし、その都度ACTION（改善）を行いながら、最終ステージ（学年末）には、次年度を見通したACTION（改善）を行うようにする。

(6) 年間計画の作成

以上の計画を盛り込み、年間計画を作成した。

2 年間を見通した研修体制のマネジメントサイクルPLAN（計画）の段階（平成23年度の取組）

(1) 新しい研究テーマの共通理解

「考え合い・伝え合い」の具体的な姿や研究テーマなどを資料を使って確認した。

(2) 組織づくり

推進委員会、全体会、専門部会の役割と連携について確認し、2つの専門部会の組織づくりを実際に行った。

(3) 研究授業の構成

3種類、計6回の研究授業の日程を組んだ。

拡大研究授業			
6 / 28 (月)	1 年	国語科	
9 / 9 (金)	2 年	生活科	
特別研究授業			
10 / 28 (金)	3 年	総合的な学習	
10 / 28 (金)	4 年	社会科	
研究授業			
11 / 29 (水)	6 年	総合的な学習	
11 / 30 (火)	5 年	国語科	

また、それにより、便宜上1年間を下記のように3つのステージに分けた

第1ステージ……拡大研究授業を核とした取組を実施する期間
第2ステージ……特別研究授業を核とした取組を実施する期間
第3ステージ……研究授業を核とした取組を（最終ステージ）実施する期間

(4) 研修会の充実

成果が研究授業に表れるよう、拡大研究授業の前に研修会を段階的に設定をした。

研修会①は、6月28日の拡大研究授業1の前に設定することで、「考え合い・伝え合い」のイメージをもって授業に臨めるようにした。研修会②も、6月28日の拡大研究授業1の前に設定することで、「授業づくりシート」を使って授業開発ができるようにするとともに「概念化シート」を使ったワークショップ型の事後検討会が開催できるようにした。

研修会③は、9月9日の拡大研究授業2の前に設定することで、「授業の技」を取り入れた授業ができるように計画した。

(5) 評価と改善

「研修内容の形成」と「研修体制の整備」に関わる振り返りの実施日を下記のように確定した。

1 回目（4月12日）…昨年度（福祉教育）について
2 回目（9月10日）…第1ステージまでについて
3 回目（12月1日）…第3ステージまでについて

なお、本年度（平成23年度）、第2ステージが終了した時点での評価を計画しなかったのは、第3ステージとの間隔が1か月程しかなく、調査項目の内容が評価の実態として反映しにくいと判断したからである。ただし、その代わりに、「学校訪問に向けたアンケート」を第2ステージが終了する10月28日に実施し、「授業の技」等、教師の取組状況を把握することとした。

(6) 年間計画の確定

昨年度立てた年間計画を確定させた。

平成23年度の年間計画

日 期	推進委員会	全体会	総合・生活科部会	各教科部会
4/11 (月)	P 研究推進の推進事項1の協議			
4/12 (火)		C 昨年度の振り返り（紙面）		
4/20 (水)	P 研究推進の推進事項1の協議・協議			
4/25 (日)	P 研究推進の推進事項2の協議			
5/2 (月)	P 研究推進の推進事項2の協議・協議	P 研究推進の推進事項1の協議・協議	P 研究推進の推進事項1の協議・協議	
5/19 (水)	P 研究推進の推進事項3の協議・協議	P 研究推進の推進事項3の協議・協議		
5/25 (火)	D 研修会① 授業ビデオの取組			
6/7 (水)	D 研修会② 授業づくりシート・概念化シート活用			
6/10 (土)				D 拡大研究授業1の事後検討会①
6/22 (金)	D 拡大研究授業1の事後検討会②			
6/28 (金)	D 拡大研究授業1・事後検討会			
7/1 (日)	P 研究推進の推進事項4の協議	P 研究推進の推進事項4の協議（紙面）		
7/29 (日)	D 拡大研究授業2の事後検討会①			
8/1 (月)				D 拡大研究授業2の事後検討会②
8/2 (火)	D 研修会③ 授業の技を知る会			
8/10 (水)			D 3年 特別研究授業1の事後検討会①	D 4年 特別研究授業2の事後検討会①
8/19 (金)	D 拡大研究授業2の事後検討会②			
8/23 (火)			D 3年 特別研究授業1の事後検討会②	D 4年 特別研究授業2の事後検討会②
9/9 (金)	D 拡大研究授業2・事後検討会			
9/12 (日)	C 第1ステージの振り返り（紙面）			
9/12 (日)	A 第1ステージの改善計画 P 研究推進の推進事項5の協議			
9/15 (水)		A 第1ステージの改善計画 P 研究推進の推進事項5の協議・協議		
9/28 (水)			D 3年 特別研究授業1の事後検討会③	D 4年 特別研究授業2の事後検討会③
10/12 (水)		D 3・4年 特別研究授業準備打ち合わせ		
10/23 (火)	C 学校訪問に向けたアンケート（紙面）		D 3年 特別研究授業1（学校訪問）・事後検討会	D 4年 特別研究授業2（学校訪問）・事後検討会
10/31 (日)	A 第2ステージの改善計画 P 研究推進の推進事項6の協議	A 第2ステージの改善計画 P 研究推進の推進事項6の協議（紙面）		
10/31 (日)	P 研究推進の推進事項6の協議			
11/1 (月)			D 6年 研究授業1の事後検討会①	D 6年 研究授業2の事後検討会①
11/6 (水)			D 6年 研究授業1の事後検討会②	D 6年 研究授業2の事後検討会②
11/15 (水)			D 6年 研究授業1の事後検討会③	D 6年 研究授業2の事後検討会③
11/21 (火)		D 5・6年 研究授業準備打ち合わせ		
11/29 (水)		D 6年 研究授業1・事後検討会		
11/30 (木)		D 5年 研究授業2・事後検討会		
12/1 (木)		C 年間の振り返り（紙面）		
1/10 (水)	A 次年度に向けた改善計画 P 次年度に向けた改善計画（紙面）			
1/20 (金)		A 次年度に向けた改善計画 P 次年度に向けた改善計画①		
1/25 (水)		A 次年度に向けた改善計画 P 次年度に向けた改善計画②		
1/31 (火)	P 次年度の計画協議			
2/4 (日)		P 次年度の計画協議		

3 年間を見通した研修体制のマネジメントサイクルDO（実施）の段階

(1) 6つの研究授業を核とした取組

研修内容のマネジメントサイクルに従って、6つの研究授業を核とした授業改善の取組を以下の通り行った。

- 拡大研究授業1 1年生国語科「はなのみち」を通した授業改善

- 拡大研究授業2 2年生生活科「まつりをつくろう！」を通した授業改善
- 特別研究授業1 3年生総合的な学習「地域のおじいさん、おばあさんから学ぼう」を通した授業改善
- 特別研究授業2 4年生社会科「事故や事件からくらしを守る」を通した授業改善
- 研究授業1 6年生総合的な学習「世界の国々と日本のつながりを考えよう」を通した授業改善
- 研究授業2 5年生国語科「大造じいさんとがん」を通した授業改善

(2) 拡大研究授業1を核とした取組

6つの研究授業を核とした授業改善の取組の中から1回目の拡大研究授業を例にして述べる。

① 拡大研究授業1の取組の日程

6月28日（火）に第1学年のベテラン教師3名が国語科「はなのみち」という物語文の第8時を計画した。これは、新しい研究テーマになって初めての研究授業である。

ここでは、「研修会①『考え合い・伝え合い』を取り入れた授業のイメージを共有化するための研修会～授業ビデオの視聴を通して～」と「研修会②授業のつくり方・見方を共有化するための研修会～授業づくりシートと概念化シートを通して～」を関連させて日程を組んだ。

拡大研究授業1を核とした取組の日程

期 日	開催組織	内 容
5月25日（水）	全体会	研修会①「考え合い・伝え合い」を取り入れた授業のイメージを共有化するための研修会～授業ビデオの視聴を通して～
6月7日（火）	全体会	研修会②授業のつくり方・見方を共有化するための研修会～授業づくりシートと概念化シートを通して～
	学年会	P 「授業づくりシート」・指導案検討
6月10日（金）	各教科等部会	P 拡大研究授業1の事前検討会①
	学年会	P 「授業づくりシート」・指導案検討
6月22日（金）	全体会	P 拡大研究授業1の事前検討会② P 事前打合せ
	学年会	P 「授業づくりシート」・指導案検討
6月28日（火）	全体会	D 拡大研究授業1 第1学年国語科「はなのみち」 C 「概念化シート」を使った事後検討会
以降		A 日々の授業実践

② 1年生国語科「はなのみち」を通した授業改善P(計画)の段階の前

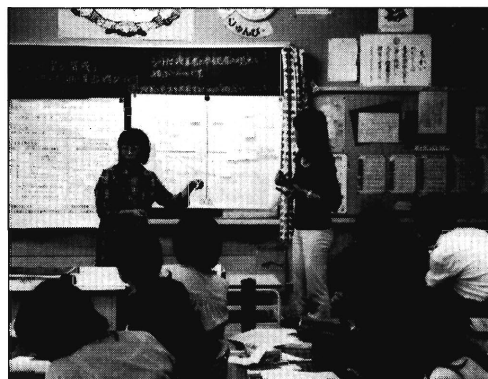
学んだことが実際の拡大研究授業D（実施）に生かされるように、P（計画）の前に、2つの研修会を設定した。

研修会①は、「考え合い・伝え合い」を取り入れた授業のイメージを共有化するために設定した。ここで

は、4年生の総合的な学習の授業ビデオにより、基本的な「考え合い・伝え合い」の具体を理解した。

研修会②では2年生の国語科「お手紙」の授業ビデオを視聴し、さらにそのイメージを膨らませるとともに、授業を計画するための「授業づくりシート」と授業を評価するための「概念化シート」の活用法を理解した。「授業づくりシート」の活用法としては、まず、記入方法を理解し、それを指導案や授業に活用する方法を確認した。「概念化シート」の活用法としては、「概念化シート」を使った事後検討会を擬似的に体験した。ここでの「概念化シート」は、初め「授業

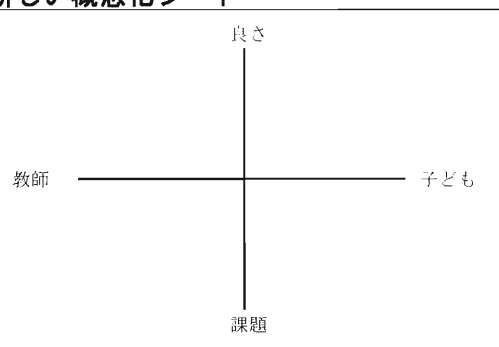
づくりシート」の内容を連動させようと、X軸の左に本時の言語活動の方法、右に子どもの言語活動を配置した。そして、2年生「お



手紙」の授業ビデオを視聴し、本時の言語活動の方法や子どもの言語活動についての良さや課題を付箋に書き、貼付をしながら授業分析を行った。

しかし、教師からは、「本時の言語活動の方法と子どもの言語活動」は対局にならないために付箋が貼りにくい。」「子どもの言語活動そのものが本時の言語活動の方法によるものなので、分けて貼るのは難しい。」という意見が出された。そのため、研修会②の終了後、数名の教師で残り、座標軸の検討をした。さらには、研修会②についての事後アンケートをとり、「概念化シート」についての意見や要望を集約した。そこで、教師の声を反映させて、新たに「概念化シートを使った事後検討

新しい概念化シート
会の方法について」というマニュアルを作成し、共通理解を図った。新しい「概念化シート」のX



軸は教師と子どもに改めた。

P(計画)の段階

1年生担任は、この2つの研修会を経て、国語科「はなのみち」を教材に授業改善に取り組んだ。

学年会では、想像豊かに楽しく音読発表させることで、それを聞いた児童も豊かに感想を「考え合い・伝え合い」できると考え、物語文「はなのみち」の音読

発表のなかで、感想を「考え合い・伝え合い」させることを計画した。具体的には、登場人物が話をしていることや考えていることを地の文や挿絵から自由に想像させ、それを吹き出しに書かせる。そして、それを音読に取り入れ発表をさせようと考え、「授業づくりシート」と学習指導案を作成した。作成した「授業づくりシート」については、記入内容にやや曖昧な点が見られたものの、各教科等部会と全体会の2回の事前検討会のなかで、児童にどんな言語活動をさせたいのかを明確にしていっていった。また、「授業づくりシート」と学習指導案の関連についてもそれぞれの実物をもとに以下のように確認した。

- 「授業づくりシート」内の「①授業でどんな考え合い・伝え合いをしたいか」「②それを取り入れる留意点」に書いた内容は、知多地方の学習指導案「5備考(2)指導の力点」として表すことができる。
- 「授業づくりシート」内の「③期待される子どもの言語活動の姿」は、知多地方の学習指導案の「4本時の学習指導(5)本時の評価規準」として書き表すことができる。

D(実施)の段階

実際の授業では、児童が登場人物のお面を着けて、身振り手振りを入れながら、また、吹き出しに書いた言葉を時折入れながら楽しく音読発表を行った。そして、聞き手は感想を積極的に「考え合い・伝え合い」した。しかし、「考え合い・伝え合い」の内容は、友達の豊かな感性に気を留めるものではなく、技能に着目したものになってしまった。

C(評価)の段階

概念化シートを使った初めての事後検討会では、教師と子どもの良さを青色、課題を赤色の付箋に書き、新しくなった「概念化シート」上に貼付をしながら、グループに分かれて検討を進めた。ここでは、思考・判断・表現よりも技能を重視した音読発表になったことが指摘されるとともに、その原因を「『授業づくりシート』に書いた単元の目標『思考・判断・表現—音読発表を自信をもって行い、他のグループの発表に対して感想を言う』が思考・判断・表現のための目標になっていなかった。」、「児童のめあてのめたせ方に課題があった」などと分析した。

ベテランの教師と中堅の教師により、進んだ感のある事後検討会ではあったが、検討は効果的に進行した。

A(改善)の段階

今回の授業を通して、以下の3点を日々の授業実践で改善していくこととした。

- ・ 「考え合い・伝え合い」は、単元の目標達成のために行うことを意識して行う。
- ・ 「授業づくりシート」の記入について、共通理解を深めるための手立てを講じる。
- ・ 次回の拡大研究授業2の事後検討会では、教師全員が積極的に参加できる手立てを講じる。

③ 授業改善の成果

拡大研究授業1における授業改善の成果について述べる。

- D(実施)拡大研究授業1での「考え合い・伝え合い」は、技能面に着目したものになったものの、教師は児童に楽しく音読発表の感想を「考え合い・伝え合い」させることができた。それは、P(計画)の段階の前に、研修会①と研修会②を設定し、2本の授業ビデオを視聴したことにより、教師が「考え合い・伝え合い」のイメージをもったうえで、D(実施)の段階で授業実践をすることができたからだと考え。

- 授業者は、試行錯誤をしながらも、P(計画)の段階において「授業づくりシート」を作成し、それをもとに学習指導案を作成したり、検討したりすることができた。それは、P(計画)の段階の前に研修会②を設定し、「授業づくりシート」の作成、学習指導案への生かし方、授業への生かし方という一連の流れを確認することができたからだと考え。

- 初めてのC(評価)の段階での事後検討会で、「概念化シート」を円滑に使用し、授業を評価することができた。それは、P(計画)の段階の前に研修会②を設定し、「概念化シート」を使った事後検討会の仕方を学んだことと、「概念化シート」の問題点を見出し、本校教師によって納得のいくものに改善し、その運用方法を事前に共有することができたからだと考え。

拡大研究授業1のA(改善)の段階で見出された改善点については、次の拡大研究授業2の課題として、改善を行った。このようにして、6つの研究授業を核とした授業改善の取組を実施していった。

4 年間を見通した研修体制のマネジメントサイクル CHECK(評価)の段階

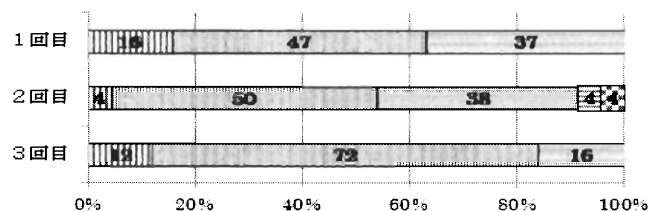
「研修内容の形成」、「研修体制の整備」についての振り返りを3回行った。結果を記す。

凡例	<input type="checkbox"/> 大いにあてはまる	<input type="checkbox"/> あてはまる
	<input type="checkbox"/> あまりあてはまらない	<input type="checkbox"/> あてはまらない
	<input type="checkbox"/> 未回答	

※なお、1回目の調査は、昨年度の現職教育「福祉教育」についての振り返りのため、実施していない評価項目も有る

(1) 研修内容の形成についての振り返り 新しい研究テーマの設定の視点から

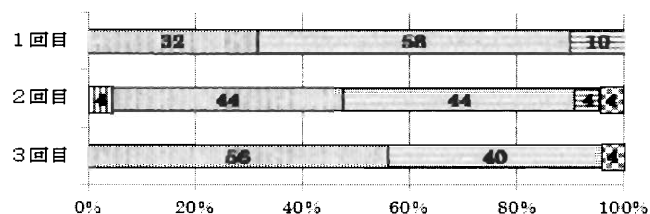
① 研究テーマや目標を理解している。



○徐々に理解されつつあるが、研究を始めて初めての調査（2回目）で、約半数しか理解できていない。

組織の見直しの視点から

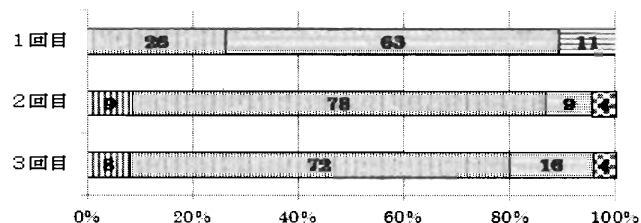
② 学年会・専門部会・推進委員会・全体会などの組織のなかで、自分の力を生かすことができる。



○徐々に生かされつつあるが、約半数が生かし切れていない。

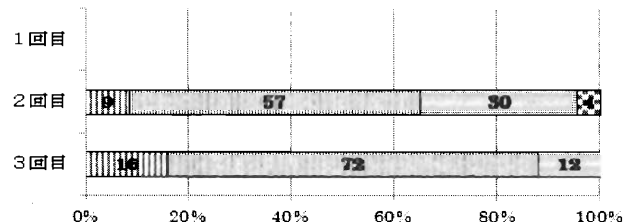
研究授業の体制づくりの視点から

③ 研究授業や検討会を自分の授業改善に生かすことができる。



○生かすことができる教師が大半だが、生かしていない教師が第3回目の調査で増加した。

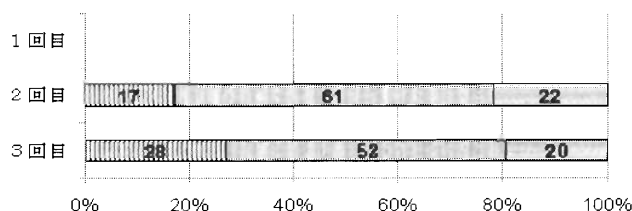
④ 思考力・判断力・表現力の育成や単元の目標の達成のために言語活動を手段として取り入れていることが理解できている。



○徐々に理解をしえてきている。

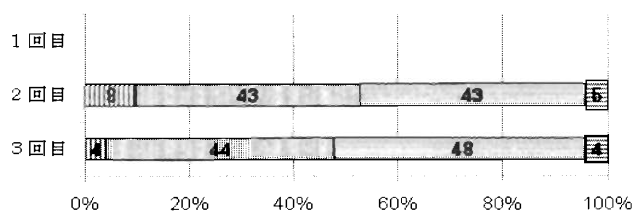
研修会の設定の視点から

⑤ 「授業ビデオの視聴」の研修会などを通して、言語活動を取り入れた授業のイメージをもつことができる。



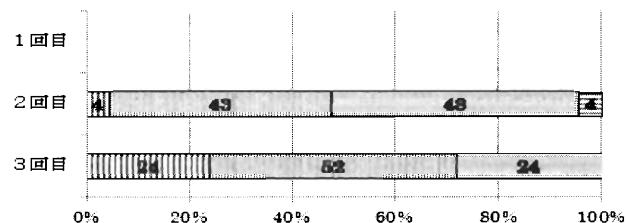
○ほとんどの教師がイメージをもっているが、まだ、20%の教師がもてていない。

⑥ 「授業づくりシート」などを通して、指導案の作成など、授業のつく方について、見通しをもつことができる。



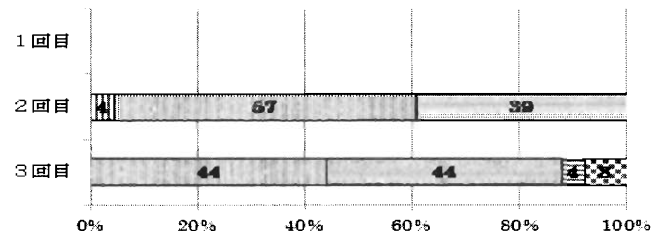
○授業のつくり方に見通しがもてない教師が半数いる。

⑦ 「概念化シート」を使った事後検討会などから、授業の見方が分かるようになってきている。



○徐々に成果がある

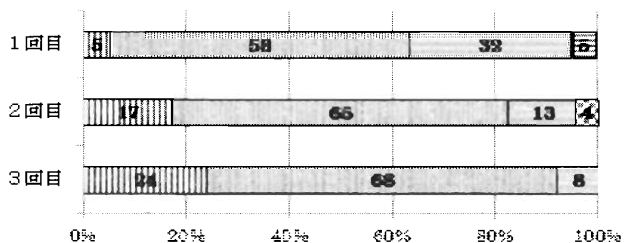
⑧ 研修会や「授業の技」などを手掛かりに、日常の授業における子どもの考えや思いを引き出せるようになってき



○3回目の調査で、引き出せると答えた教師が減った。

*「学校訪問に向けたアンケート」からは、個々の教師が積極的に「授業の技」等を使っていることが分かった。子どもの考えや思いを引き出せているか自信がないと答える教師が多かった。

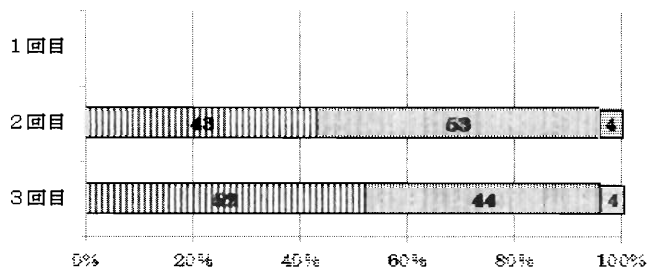
⑨ 研修会などにより、授業の視野を広げることができている。



○徐々に成果が出てきている。

その他

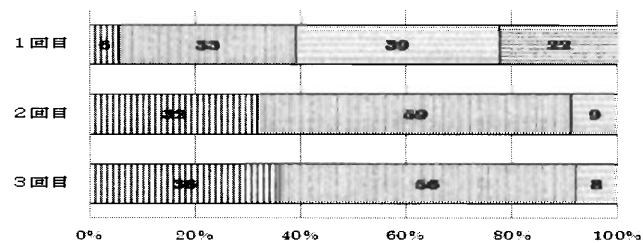
⑩ 教師同士で学び合うことは楽しい。



○ほぼ全員が楽しいと感じている。

(2) 研修体制の整備についての振り返り 新しい研究テーマの設定の視点から

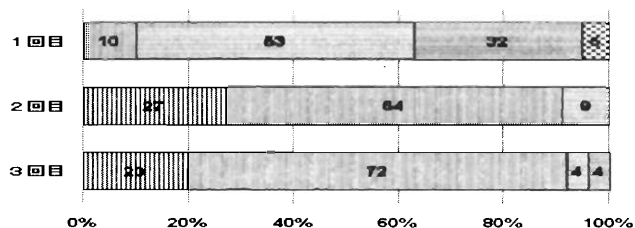
① 研究は、今日的な教育実践に役立つ内容になっている。



○概ね役立つと感じている。

組織の見直しの視点から

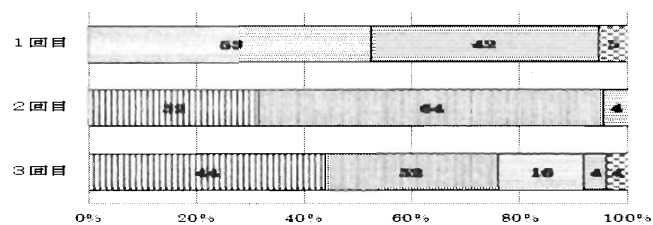
② 校内研修の組織が確立し、計画的に研修を実施している。



○概ね計画的と言える。

研究授業の体制づくりの視点から

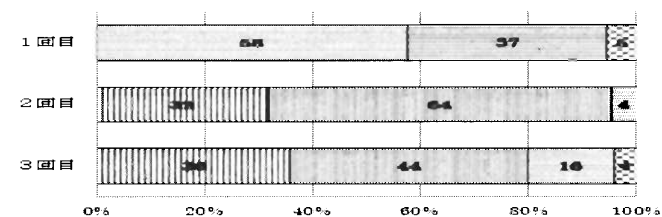
③ 研究授業を行ったり参観したりする機会が効果的に計画されている。



○概ね計画的と言えるが、3回目に「大いにあてはまる」「あてはまる」が減った。

研修会の設定の視点から

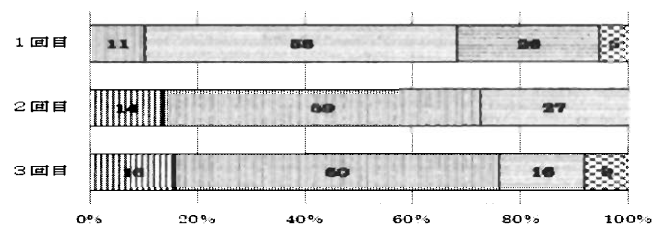
④ 授業や指導方法等について、研修する機会を積極的にもっている。



○概ねもっていると考えるが、3回目に「大いにあてはまる」「あてはまる」が減った。研修回数が多いという意見があった。

評価と改善の工夫の視点から

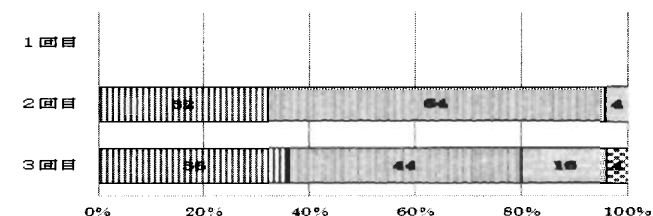
⑤ よりよい校内研修のために、教師の意見をよく反映させている。



○徐々に成果が出てきているが、「あてはまらない」とする教師がいる。

年間計画の作成の視点から

⑥ 研修に見通しがもてるよう、研修の日程が分かりやすく示されている。



○3回目に「大いにあてはまる」「あてはまる」が減った。分かりやすいが、研修回数が多いという意見があった。

5 年間を見通した研修体制のマネジメントサイクル ACTION (改善) の段階

(1) 振り返りの総括

「研修内容の形成についての振り返り」10項目は、手立てを講じなかった昨年度と比べ、よい成果が表れた。教師一人一人が「考えさせる授業」へと授業改善を進め、その資質向上の手応えを少しずつ感じていることが分かった。また、「研修体制の整備についての振り返り」6項目は、特に高い水準において成果が表れた。学びの共同体としての機能が全校的に形成されつつあることを感じる事ができた。また、「研修内容の形成についての振り返り」の「教師同士で学ぶことは楽しい」という項目に対しても、96%の教師が「あてはまると答えるなど、学びの共同体としての機能形成は、教師一人一人の意識レベルにおいても成果となって表れてきていることが分かった。

(2) 次年度(平成24年度)に向けた改善点

しかし、教師の意見と併せて結果を詳細に分析すると、まだまだ課題があることが分かった。そこで、次年度の校内研修をよりよいものとするために、推進委員会と全体会で、改善点を協議した。

① 研究の展望と共通理解に関わる改善点

- ・ 研究の内容が徐々に浸透してきているため、研究テーマについては、継続する。本年度(平成23年度)を土台作りの年として、次年度よりさらに3年間実施する。
- ・ 次年度は、言語活動の基礎となる国語に絞って研究を進め、他教科に広げていく。
- ・ 教師全員が研究テーマを共通理解するために、めざす子ども像を明確にする。さらに、共通理解のためのワークショップを開催する。
- ・ 各学年の発達段階を押さえた言語活動の系統性を理解するために「系統的なスキル」を作成する。
- ・ 個(一人で考える)→集団(考え合い・伝え合いをする)→個(考えを再構築する)等、本校の1時間における授業スタイルを定型化する。

② 組織の活性化

- ・ 次年度の研究を国語科に特化したことにより、「各教科等部会」「総合・生活科部会」を改め、次年度は「1, 3, 5年(奇数学年)部会」「2, 4, 6年(偶数学年)部会」とする。これにより、学年会を基盤とした研究授業の提案がより円滑に進むと考える。また、低・中・高学年の系統性も保持ができると考える。
- ・ 専門部会が研究授業を核とした取組の仕切りをするなど、専門部会の取組を活性化することで、一人一人の力量発揮の場を増やす。

③ 研究授業の体制づくり

- ・ 6回の研究授業の時期を調整することで、教師の負担を減らす。

- ・ 本年度、事前検討会の回数が増え、全体の会議回数が当初の計画より大幅に増えた。次年度は、教師の負担を減らすために、事前検討会は、2回までとする。共通理解が図れない場合は、研究通信や会議速報を発信することで補う。
- ・ 事前打ち合わせ会は、別途設けず、事前検討会と同日に行うことを徹底する。
- ・ 長期休業を活用した計画を立てる。
- ・ 「授業づくりシート」については継続する。ただし、活用法を再確認し、その意義を共通理解する。
- ・ 「概念化シート」による事後検討会は浸透し、活用できているため、継続する。付箋の色は、1色とする。グループ協議と全体協議の二段構えとし、検討会の質的向上を図るために、常に運用の方法を考える。
- ・ 「授業の技」については、継続する。「片葩小授業の技(系統的なスキル)」を作成する。

④ 研修会の充実

- ・ 「授業の技」を使い、子どもの思いや考えを引き出す具体を理解するために、先進校の授業参観を取り入れる。
- ・ 本校が目指す子ども像を明確にするとともに「授業づくりシート」の活用法を理解するために、新学習指導要領で求められている「言語活動の重視」についての研修会を設定し、研究テーマについての共通理解を進める。
- ・ 国語科の教材解釈に関わる研修会を設定する。また、この研修会を拡大研究授業に関連させる。

⑤ 評価と改善

- ・ よりよい校内研修にするために、研修内容の形成、研修体制の整備に関わる振り返りは継続する。

⑥ 年間計画の作成

- ・ 会議や研修回数を精選するとともに、年間の見通しをもつために年間計画を作成する。また、その計画を学期ごとに確定させていく

VII 研究のまとめ

1 教員の資質向上について

本年度、研究授業を通して私たちが見た児童の姿は、去年では見られないものだった。ここには、児童が、言語活動(考え合い・伝え合い)を通して、思考を深めたり、表現をしたりする姿があった。そして、その陰には「考えさせる授業」を実践してきた教師の取組があった。

本年度、研究授業が無かった本校に研究授業を取り入れた。研究授業は、大変労力のかかるものである。だからこそ、その授業を形骸化させることのないようにと研究授業を大事にし生かそうと考えた。研究授業は、授業者だけでなく、参観者も力量を付ける絶好の機会であるととらえ、授業者と参観者が共に学び合え

るシステム「研究授業を核とした研修内容のマネジメントサイクル」を作り上げた。ここでは、P（計画）、D（実施）、C（評価）、A（改善）の流れを明らかにし、そのなかで授業者と参観者が共に授業計画力、授業実施力、授業評価力、授業改善力を身に付けるための計画や手立てを練り、「授業改善」を進めてきた。これにより、教師の資質の向上を見ることができた。

研究1年目として、課題は多いものの授業改善に向けた校内研修の構築を研修内容を形成するという側面から支えてこられたものと考ええる。

2 学びの共同体としての機能形成について

「…その時の勉強がとても楽しくて、5年生の授業を見るのを心待ちにしていました。…」

これは、研究授業2に参加した教職2年目の教師の感想である。教材研究を楽しいと感じ、さらに、それに関わる11月の研究授業を心待ちにした。

学校全体で「考えさせる授業」へと授業改善のための体制を整えたことで、学びの共同体としての機能が、全校レベルだけでなく、個人レベルとしても形成されてきたと考える。そして、その他にも、本年度、以下のように共に学ぼうとする教師の姿を見ることができた。

- ・ 6月の研修会②において、「概念化シート」の横軸についての問題点を見付け、教師の手で改善させた。
- ・ 11月に、特別支援学級の担任が特別支援学級での「考え合い・伝え合い」を発信しようと研究授業を自主的にを行い、参観を呼び掛けた。
- ・ 現職教育のサイドメニューとして、英会話講座やなわとび講座等、現職自主講座を9回行った。
- ・ 10月28日の学校訪問に向けた取り組みアンケートを行った結果、教師は夏休みに学んだ「授業の技」に進んで取り組んできたことが分かった。

これらの成果には、「研究授業を核とした研修内容のマネジメントサイクル」という内容面だけでなく、それを支えるために「年間を見通した研修体制のマネジメントサイクル」という体制面におけるシステムを取り入れたことが大きいと考える。本校の校内研修の実態から見出された課題を克服するための計画を教師集団や教師一人一人の力量形成に寄与するようPLAN（計画）の中でじっくり作り上げ、計画的な年間計画のもと、DO（実施）、CHECK（評価）、ACTION（改善）を実践できるようにした。教師は、そのサイクルのなかで計画したり実践したりして、その手応えを実感していった。共同体として「学ぶ楽しさ」を確認し、さらに、個人レベルにおいて、進んで学ぼうとする気持ちや態度を醸成していったと考える。この「年間を見通した研修体制のマネジメントサイクル」を取り入れたことで、研修体制を整備し、学びの共同

体としての機能を形成していったものと考ええる。

また、校長は、学校経営の柱に教師の授業力向上を掲げ、「教師は授業で勝負」を合い言葉に学校運営を行い、「校長連絡」のなかでそれに触れてこられた。こうした学校運営のなかで、研究を実践したこともあり、効果的に成果が表れたものと考ええる。さらには、現職主任が発行する片葩小研究通信「学びの共同体を目指して」は、現職教育の根幹を支え、教師の共通理解を図ったり、士気を高めたりするのに効果的であったと考える。

授業改善に向けた校内研修の構築を研修体制を整備するという側面から支えてこられたものと考ええる。

3 2つのマネジメントサイクルを組み合わせた成果

「研究授業を核とした研修内容のマネジメントサイクル」だけでは、授業改善に向けた教師一人一人の資質向上には役立つものの、学校組織としての前進にはならなかっただろう。本校の校内研修の実態より見出した課題を克服するために、「年間を見通した研修体制のマネジメントサイクル」だけ作っても、教師一人一人の授業改善の実態がなければ、体制は形骸化しただろう。

このように、授業改善に向けた校内研修の構築のために2つのマネジメントサイクルを組み合わせたことにより、効果的に授業改善が進み、教師の達成感や成果につながる校内研修を構築することができたと振り返る。

参考文献

- ・ 田村知子 実践・カリキュラムマネジメント
ぎょうせい 2011年 195P
- ・ 広島県教育委員会
授業改善のための校内ハンドブック 2003年
- ・ 奈良女子大学附属小学校学習研究会
新訂「奈良の学習法」確かな学習力を育てるすじ道
明治図書 2008年 168P